



岐阜大学機関リポジトリ

Gifu University Institutional Repository

中国における牛肉の生産・流通に関する研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2008-02-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 陳, 暁紅 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12099/2586">http://hdl.handle.net/20.500.12099/2586</a>

氏名(本国籍)	陳 曉 紅 (中華人民共和国)
学位の種類	博士(農学)
学位記番号	農博甲第245号
学位授与年月日	平成14年3月13日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科及び専攻	連合農学研究科 生物生産科学専攻
研究指導を受けた大学	岐阜大学
学位論文題目	中国における牛肉の生産・流通に関する研究
審査委員会	主査 岐阜大学 教授 小栗 克之 副査 岐阜大学 教授 有本 信昭 副査 信州大学 教授 佐々木 隆 副査 静岡大学 教授 木宮 健二

### 論文の内容の要旨

本論文は、近年、急速に伸びている中国の牛肉生産に焦点をあて、牛肉の生産・流通及び消費について調査・分析し、その実態と問題点、及び発展方向を明らかにしたものである。

生産面についていえば、次の3点を明らかにしている。第1点は牛肉の生産地域が従来の牧草地帯(西部牧区)から穀物地帯(東北農区や中原農区)へと移っていること。第2点は、穀物地帯における養牛業の発展要因として農作物の副産物(わらなど)を飼料源として活用する政策の実施(1992年からの中国養牛事業)が大きな役割を果たしていることを明らかにした。その養牛事業の成功要因としてアンモニア処理によるわら利用の技術普及がある。第3点は、このような農作物わら利用による養牛飼養は、欧米や日本のような穀物依存型でもなく、オーストラリアのような草地利用型でもない中国独自の展開方向であることを明らかにしている。

流通面についていえば、1978年の改革開放を境として中国牛肉市場の流通体系は大きく変化したことを指摘し、新しい流通体系の実態と問題点、解決方向を明らかにしている。流通体系の変化についていえば、改革開放前は国営企業による単一市場流通システム(国が統一的に生体牛や牛肉の価格を決め、国営企業が生体牛を農家から購入し、屠殺・解体して消費者に販売)であったが、改革開放後は国営、集団及び個人営の多ルートの市場体系が形成されたことである。問題点としては、卸売市場を経由するルート(屠殺工場から卸売市場へ)と経由しない

ルート（屠殺業者から小売店へ）があり、後者に問題が多いことが指摘されている。すなわち、前者のルートにある屠殺工場は近代的な屠殺設備を持ち、衛生的に牛肉の加工処理がなされているのに対し、後者（屠殺業者）は、簡単な設備しか持たず、非衛生的であり、牛肉製品の品質もよくない。したがって、生産面での牛肉の品質向上とともに、その点の改善が望まれる。

最後に牛肉の消費についていえば、つぎの2点を分析している。第1に牛肉消費形態の変化、第2に牛肉消費の増加要因である。第1点の牛肉消費形態の変化に関していえば、従来の伝統的な牛肉の調理法から外国の食文化の影響を受けて、焼肉やハンバーガーなどの利用が増加していること。また、牛肉の家庭消費よりも、外食消費量が多くなっていることを実証的に明らかにしている。さらに、この牛肉消費の増加は地域や収入によって異なることも指摘している。一般に農村地域よりも都市部の住民の方が牛肉消費量やその増加率は高い。また収入（所得）の高い世帯の方が低い世帯よりも牛肉の消費量は高い。このことから、牛肉消費の増加要因として、中国国民の収入（所得）の増加や都市化の進行があることを明らかにしている。

## 審 査 結 果 の 要 旨

本論文は、近年、急速に伸びている中国の牛肉生産に焦点をあて、牛肉の生産・流通及び消費について調査・分析し、その実態と問題点、及び発展方向を明らかにしたものである。

生産面についていえば、次の3点を明らかにしている。第1点は牛肉の生産地域が従来の牧草地帯（西部牧区）から穀物地帯（東北農区や中原農区）へと移っていること。第2点は、穀物地帯における養牛業の発展要因として農作物の副産物（わらなど）を飼料源として活用する政策の実施（1992年からの中国養牛事業）が大きな役割を果たしていることを明らかにした。その養牛事業の成功要因としてアンモニア処理によるわら利用の技術普及がある。第3点は、このような農作物わら利用による養牛飼養は、欧米や日本のような穀物依存型でもなく、オーストラリアのような草地利用型でもない中国独自の展開方向であることを明らかにしている。

流通面についていえば、1978年の改革開放を境として中国牛肉市場の流通体系は大きく変化したことを指摘し、新しい流通体系の実態と問題点、解決方向を明らかにしている。流通体系の変化についていえば、改革開放前は国営企業による単一市場流通システム（国が統一的に生体牛や牛肉の価格を決め、国営企業が生体牛を農家から購入し、屠殺・解体して消費者に販売）であったが、改革開放後は国営、集団及び個人営の多ルートの市場体系が形成されたことである。問題点としては、卸売市場を経由するルート（屠殺工場から卸売市場へ）と経由しないルート（屠殺業者から小売店へ）があり、後者に問題が多いことが指摘されている。すなわち、前者のルートにある屠殺工場は近代的な屠殺設備を持ち、衛生的

に牛肉の加工処理がなされているのに対し、後者（屠殺業者）は、簡単な設備しか持たず、非衛生的であり、牛肉製品の品質もよくない。したがって、生産面での牛肉の品質向上とともに、その点の改善が望まれる。

最後に牛肉の消費についていえば、つぎの2点を分析している。第1に牛肉消費形態の変化、第2に牛肉消費の増加要因である。第1点の牛肉消費形態の変化に関していえば、従来の伝統的な牛肉の調理法から外国の食文化の影響を受けて、焼肉やハンバーガーなどの利用が増加していること。また、牛肉の家庭消費よりも、外食消費量が多くなっていることを実証的に明らかにしている。さらに、この牛肉消費の増加は地域や収入によって異なることも指摘している。一般に農村地域よりも都市部の住民の方が牛肉消費量やその増加率は高い。また収入（所得）の高い世帯の方が低い世帯よりも牛肉の消費量は高い。このことから、牛肉消費の増加要因として、中国国民の収入（所得）の増加や都市化の進行があることを明らかにしている。

近年、急速に伸びている中国の牛肉生産の実態と問題点を、生産・流通・消費という一貫した流れのなかで、本研究が解明している点は高く評価される。とくに、近年、政府によって進められている農作物副産物利用による養牛飼養事業の社会経済的効果を立証し、中国の肉用牛飼養の展開方向として位置付けたことは、欧米や日本のような穀物依存型でもなく、またオーストラリアのような草地利用型でもない中国独自の第3の展開方向として注目される。

以上について、審査員全員一致で、本論文が岐阜大学大学院連合農学研究科の学位論文として十分価値あるものと認めた。

基礎となる学術論文は、以下の通りである。

- 1) 陳 曉紅・小栗克之・李 鎖平. 農作物わら利用による中国養牛事業の展開. 農業経営研究 38(2):73-78. 2000.
- 2) 陳 曉紅・小栗克之. 中国における牛肉市場分析. 農業経済論集. 52(2). 2001 (印刷中),